



TITLE:

憧れの花山を訪ふ

AUTHOR(S):

北村, 重雄

---

CITATION:

北村, 重雄. 憧れの花山を訪ふ. 天界 1932, 12(137): 316-317

ISSUE DATE:

1932-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162248>

RIGHT:

## 憧れの花山を訪ふ

會員 北村重雄

今日こそは、本會へ入會以來、憧れてゐた花山へ同好者諸兄と飛んで行く日である。前以て中村氏に參觀について御依頼して其の承諾も得てあつた。又殊に僕にとつては、星を知つてより數年來の宿望であつた所の、望遠鏡を手にする事の出来る日だつたので、前夜などは、仲々嬉しさの餘り、よく眠れなかつた位である。

午前十一時天満橋集合、一行六人の燃ゆる思ひを乗せて、電車はひた走りに走る。各々携へた材料を中に、車中一しきり天文談が賑はふ。いつの間に三條着、京津電車に乗換へ蹴上で下車、伊達兄の先導で一路花山頂へ。

東海道筋を約五町東行、電車線路を踏切ると、愈々花山道路に入る。道は歩一步一步、下界を離れ、迂邊曲折、静寂の中へ我等を導く。

トレミー曲路、オーマー谷、ブルーノ點、コペルニクス轉回などの名も意味深く又珍らしく、初めての僕と池西君とは先頭を切つてぐんぐんピッチを上げて急ぐ。とうとう到着、時に午後一時四十分。

宿舎で案内を乞ひ、本館に入つて先づ中村要氏にお目にかゝる。圖書室には山本先生も見えてゐた。地下室へ入り中村氏の御厚意で反射鏡や平面の研磨作業を見せて頂き、詳細なる御説明を受く。それより同氏の御案内で本館の大三十センチ屈折鏡を拜觀。一同今更乍らその雄姿に目を見張つて驚歎する。大ドームが片手で移動するのを見ては感心してゐた。屋上へ出ると四方の眺めの美しい事、殊に山科方面は眼下に手に取る様。

此處には山本先生の御放送の爲のJOBKの電線が用意されてあつた。次に構内を一巡見物し、本館に引返し圖書室に入り備付の潜望鏡で景色の觀望に興じた。碩石や蛸の標本に感心したり、天體寫眞の前に立つくしたり、最後に又地下の中村氏の部屋に歸り、こゝにて同氏を中心にして天文談に時を忘れ、打解けた話の中に有益貴重な御指導に預かり、すっかり仲好しになつて歸るのを忘れてしまふ。伊達君は最近始められた月の寫眞と僕等の少年天文研究會の會誌、MILKY WAYを、僕は間違だらけの觀測ノートを憶面もな

く見て貰つた。室内の和氣あいあいたるに引換へ、外には暗雲低迷して風勢加はり、低氣壓の近づくのを思はせる。

僕の七センチ・ニュートンが中村氏の御厚意で完成してゐたので、屋上から比叡山の灯などを見てみた。流石は日本一の中村鏡、小なりと雖もその映像の鮮明な事は全く驚く許り。かくて愉快な一日を送つた花山にも宵暗が静かに迫つて來た上に風は益々強くなつて來た。これでは今夜の例會も覺つかぬので、用意の夕食を頂き、中村氏に厚く數々の御厚情を謝し、名残惜しい花山を後にした。出来る事ならこのまゝ、止まりたいと言ふ心を誰も懷き乍ら。僕は七センチ鏡をかついで、凱旋將軍の様に暗い路を躍る足を踏しめて下る。伊達君の手には懷中電氣が光る。眼下の町の灯が段々近くなる。あゝ、懐しの花山よ！又會ふ日まで健かであれ！

あゝ、僕は決して此の日を忘れる事はないだらう。それは僕が夢の間も忘れぬ花山を訪ひ、又宿望の望遠鏡を抱いて生き甲斐ある身を天に謝した其の日である！（終）

---

御笑草までに一枚同封いたしました。實際の私よりも少し若いやうです。機械は毎日太陽黒點を觀測してゐる愛機です。レンズは五藤光學製、有効口径5.5センチ（五藤光學にて謂ふ所の5.8センチ鏡）で、全部、部分品や私の設計等にて組立てたものであります。（龜井）

